
~ I S ~ 創造録

ジョイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

～ISS～ 創造録

【Nコード】

N2314BA

【作者名】

ジョイ

【あらすじ】

神様のミスで殺されて転生したらISSの世界だった。能力は選べなかったけどチートな能力くれたので取り合えず生きて行く事に……

何の目標も持たず、空気のように生きていく男が何かをする話。

初投稿です、拙い文章ですがよろしくお願いします。

プロローグ

『すまないが……転生して貰えないか？』

『……………え？』

気がつけば真っ白い空間の中、申し訳なさそうな顔をしておっさんが俺に話し掛けていた。

~~~~~

『実は、今日死ぬはずの人間と間違えて殺してしまったんだ。』

この事が私の上司に知られるとまずいのでね、転生する形でこの事故の隠蔽をしたいのだよ。』

なるほど、信じられないけどこんな訳の分らない事を言ってくるって事は、

あんたは神様か何か？

『その通り、とは言っても中堅クラスの神様だがね』

地味に思考を読むな、

『そう言うな、思考を読んだほうが口に出して会話するより早いだろう？』

そんな事より転生してはくれんかね？何か特殊な能力を上げるから。

『

特殊能力かあ、それは自分で決められるの？

『いや、こちらで決める。とゆうか、もう決めてある。』

どんな能力だ？

『触った物を創造でき、創造したものを自在に操る事が出来る能力だ。』

一度触ったら回数回数の制限無く創造する事ができるぞ

それに加えて創造した物同士で合成する事も可能でそれらを消す事も可能だ。』

へえ、かなりチートだな。

『ついでに転生する世界もこちらで決める。こちらも生まれてからすぐに死ぬ様な』

世界じゃないから大丈夫だ。』

わかった。転生しなかった場合はどうなるんだ？

『永遠にこの空間を彷徨う事になるな。』

なるほどね、選択肢はあつてないようなものじゃあないか、分かった転生するよ。

あと一つお願いしていいかな？

『構わないぞ』

身長を大きくしてくれないかな、生前でちょっとしたコンプレックスだったから。

『そうか分かった、では転生するぞ。』

さて、どんな人生を歩む事になるのやら、  
まあ、第二の人生を楽しむか。

## プロローグ（後書き）

うん、小説を書くのは初めてですが、これは小説と言えるのでしょ  
うか？

## 主人公設定

名前

四倉しぐら辰哉たじや

経歴

神様のミスで転生した転生者。

転生した直後に周囲の人物から自分がISの世界に転生した事を知る。

原作知識はあまり無いがとりあえず原作を近くで見たいので登場人物、特に一夏

とは仲良くする、とゆうか仲が良い

容姿

黒髪で顔は中の中位

神様へのお願いで身長が平均より大きくなってる。

というか、でかい、それもかなり

能力

触った物を創造でき、創造したものを自在に操る事が出来る能力  
非常に応用ができ、一度触ったら個数回数の制限無く創造する事ができる。

また、創造した物同士で合成する事も可能で消す事も可能

## 第一話

（side一夏）

これは想像以上にキツイ

俺以外全員が女のこの教室で唯一の男である俺にはほぼ全員分の視線を背中に浴びている

「皆さんIS学園に入学おめでとう、私はこのクラスの副担任の山田真耶です。」

一年間よろしくお願いします。」

視線に耐えてると、先生が入ってきた、まるで子供が背伸びをして大人の服を着たような

幼い印象の人だな、一部を除いて。

「このIS学園では……ISの……で……」

先生は頑張って色々言っている様だが頑張れば頑張るほど先生の胸が揺れて

つい、そちらを見てしまう、俺がそれにつられて目を左右に動かしている

窓側の席から凄い殺気が飛んできた。

驚いて窓側を見たら殺気の犯人は冴らしい、

(怖い事するなあ、仕方ないじゃないか男の性なんだから)

「……………君……………斑君……………織……………君……………織斑一夏君!!」

「ッ！ハイッ」

「あのく、大声出しちゃってごめんなさい、でも「あ」からはじま  
って今「お」

なんだよね。自己紹介してくれるかな、駄目かな？」

心の中で色々愚痴を言っていたら呼ばれている事に気付かなかった。

驚いて声が裏返ったじゃないか、入学初っ端から恥かいたかったよ

自己紹介か、よし此処でカッコよく自己紹介してさっきのぶんを取  
り返さなきゃな

「えく、えつと、織斑一夏です。よろしくお願いします。」

なんだこの視線はもっと自己紹介しろってか、いかん、ここで黙っ  
たままだと

暗い奴のレッテルを貼られてしまう。覚悟を決める織斑一夏、

「スウ、」

落ち着いて息を吸って

「以上です。」

言い終わった瞬間に周りの女子達がずっこけた。

あれ、カツコよくきめたのに

「あれ、駄目でした？」

キョロキョロと周りを見てると急に頭を殴られた。

殴られた相手を見るために後ろに振り替えるとそこには千冬姉がいた。

「げっ千冬姉、」

何が駄目なのか、もう一発殴られた。

「学校では織斑先生だ。」

「先生、もう会議は終わられたんですか？」

山田先生がそう言う

「ああ、山田君、クラスへの挨拶を押しつけて悪かったな。」

なんで千冬姉がここにいるんだ？

職業不詳で月に一〜二回しか帰ってこない俺の実の姉が、

「諸君、私が織斑千冬だ君たち新人を一年で使い物にするのが仕事だ。」

「千冬様、本物の千冬様よ」

「私お姉さまに憧れてこの学園に来たんです。北九州から」

「私、お姉さまのためならしねます」。」

凄い人気だな、

「よくここまで集まる物だ私のクラスにだけ集中させてるのか？」

「お姉さま、もっと叱って罵ってえ」

「そして時には優しくして」

「付け上げらないように調教してえ」

「千冬姉が俺の担任？」

「で、挨拶もまともに出来んのかお前は」

千冬姉が指を鳴らしながらこちらを見てくる。

「いや、千冬姉、俺は、うぐっ」

ここまで言いかけた所で千冬姉に頭を机に叩きつけられた。

「織斑先生と呼べ」

「はい、織斑先生」

「え、織村君つておの千冬様の弟？」

「それじゃ、世界で唯一ISを使える男つてもそれが関係してるのかな？」

周りの女子達が小さな声で話している、ISに乗れる理由なんて知らないっーの

「静かに！」

千f：織斑先生の声で皆静かになる。

「では、少し事情があつて遅れた生徒を紹介する。  
入ってこい、四倉辰哉」

ガラガラと教室のドアを開けると、そこには自分の友人の大男が立っていた。

〈side辰哉〉

この状況は予想以上にキツイ

どうも、はじめまして転生者こと、四倉 辰哉です。

一夏を除くすべての生徒が女なのか、

やっと原作開始かあ、ここまで長かったなあ

とりあえず、扉が開いても視線が刺さって教室に入れない

教室に入る覚悟を決めてる間に

回想どっぞ。

~~~~~回想~~~~~

「おい一夏、本当にこっちで大丈夫なんだろうな？」

一夏は今とても焦っている、なぜなら今俺と一夏は迷子になってるからだ。

ちなみに俺は焦ってない、原作でこうなる事は分かってたからね。

一夏が初めてISを動かす所を見たいしね。

にしても、何で束ねさんは一夏と俺が迷うようにしたのだろうか？

俺が束ねさんに連れられて束ねさんの研究所に言った時はISを動かせなかったのに、

俺まで一緒に迷子にしても良かったのだろうか？

そんな事を考えてたら一夏が何か思いついたみたいだ。

「よし、次に見つけた扉を開ける。」

ほお、じゃあたぶん次の部屋にISが置いてあるのかな？

「わかった、それに従うよ。変な部屋開けるなよ。」

とりあえず返事をしとく

「お、扉発見、突入するぞ！」

「へいへい」

扉を開けるとそこにはISが二体鎮座していた。

「これって……IS、だよな。」

と一夏が言う

「そうだろ、ちょっと……触って見ないか？」

ここで俺が一夏がIS触れるように促す、

「でも、勝手に触っても平気かな？」

「大丈夫だって別に何も起こらないよ、それにばれなきゃ良いしね」

そう言うと一夏はISに近づいてそれに触った。

「どうだ、一夏どんな感じだ」

そう質問してみると

「すげえ、触ってるだけなのにISの情報が頭の中に入ってくるみたいだ。」

なるほど、ちゃんと起動してるみたいだな。

その後一夏がISに乗ってる所を発見されIS学園に入る事が決定した。

その際、俺もISに乗れないか調べた（触ってみた）が残念ながらISは起動しなかった。

しかし、ISに乗れない事が分かったので家に帰り

居間でゆっくりしている時に事件は起きた。

ピピピピピ…ピピピピピ…

といきなり携帯電話がなり始めた。

その携帯電話の画面には「篠ノ之 束」と表示されていた。

出ないわけにもいかないのととりあえず出てみると

「やつほ〜束ねさんだよ。ねえねえ、たつくんIS作ってよ。」

唐突に訳の分らない事を言われた。ちなみに「たつくん」とは俺の事である。

「束さんは知ってるよ今まで隠れて色んな物を創造してたよね。しかも何か創造するには

それを触らなきゃいけないんだよね。だから今日触ったISを創造してほしいなあ。」

「な、なんで束さんがそれを知ってるんですか？」

とにかく、聞いてみる。もしそれ以外の、例えば男の子の営みとか
が見られてたらマズイ

「君の部屋にはあらゆる所にカメラが仕込んであるのだ。ブイブ
イ」

なんてこつたい、

「どれくらい、盗撮してるんですか？」

確認だ。これを確認しなければ今後一切この部屋では色々と抜く事
が出来ない。

「盗撮だなんてひどい事言つなあ、うんとねえ、一日に君がその
部屋にいる時間だけ

見てるよ。」

この部屋にはもう入らない様にしよう。

「ねえ、たつくん速く作つてよ。ねえねえ速く速く！」

そんな事より、

俺の触った物を創造でき、創造したものを自由に操る事が出来る能力

(長い名前だな)は、ばれてたみたいだ。

「はあ」

溜め息と返事を混ぜたような言葉を吐き出し、束さんには何を言っても無駄なので

今日触ったISを創り出す。

「束さん、創り終わりましたよ。」

「じゃあ、そのISに触ってみよう。」

何をさせたいのか、とりあえずそのISに触ってみると、

俺はISを起動させていた。

どうやら自分で創った物はISだろうと自在に操る（起動させる）事も出来るらしい。

その後、今やった事は束さんにより録画されており、千冬さんにはれて、IS学園に

入る事になったのだ。

~~~~~回想終わり~~~~~

## 第一話（後書き）

会話だけになると何してるか分からなくなるのでそうならない様に  
気をつけてるのですがダメダメですね。

## 第二話（前書き）

一人でもお気に入りに入れてもらえるのはとても嬉しいです。  
ありがとうございます。

## 第二話

（side辰哉）

教室の全員の視線を浴びて教室に入るタイミングを逃した俺は  
教室の開いた扉の前で突っ立っていた。

「何時までそんな所にいる、さつさと入って来い。」

「は、はい。」

今千冬さんから声を掛けられなかったらずっと入れなかったな

千冬さん、有難うございます。

感謝の意味を込めて目線を送ると鼻で笑って返してくれた。

「よし…四倉、自己紹介をしろ。」

相変わらずな高圧的な声で命令してくる。

「はい、分かりました。四倉<sup>びんし</sup>辰哉<sup>たつや</sup>です。

一夏の後にISを動かせるか試されて（束さんに）動かす事に成  
功したので、

入学が決まりました。高校生活の三年間よろしくお願いします。」

千冬さんにオーラに押されながら

ハキハキ（ダラダラしたら殺される）とした声で自己紹介をする俺  
無難な挨拶だと思いが千冬さん的にはまともに挨拶出来ているだろ  
うか？

「ふん、まあ良いだろう。」

良かった。一夏みたいに叩かれなくて済んだぞ。

「きゃやああ！！」

自己紹介しただけで悲鳴が上がっている何てカオスなクラスなんだ。

「男の子？」

「しかも二人目！」

どうやら男がいる事に驚いているみたいだな。

「辰哉！？なんでお前まで此処にいるんだ？」

一夏が最もな疑問を主張する。当たり前だな、一夏がISを初めて  
動かした時

に俺はISが動かさなくてそのまま帰ったんだから。

「実はあの後で家に帰ったらあるウサギの人から電話が来てね、  
その人が用意したISを動かしちゃったんだよ。」

そういつて一夏の疑問に答える、最初は「ウサギの人？」とか言っ  
ていたが

心当たりがあるのか、「ああそう言う事か。」と言って納得していた。

「私語を慎め馬鹿者ども」

と千冬さんが注意をしてくる。

「ああ、悪い千冬姉」

と此処でまた一夏が殴られ、「学校では織斑先生だ」と注意を受けている。

「すみません、織斑先生。それで俺の席は何処ですか？」

俺は一夏見たいに殴られたくないの千冬さんではなく織斑先生と呼ぶ。

「四倉、お前の席は窓側の一番後ろだ。お前は図体が大きいからな、配慮しておいた。」

お、それは助かる。転生の時に身長を大きくしてくれとお願いしたら195cm位まで身長が伸びてしまった。平均より2〜3cm大きい位で

お願いしたつもりだったけど神様はとにかく大きくとその願いを受け取った

らしい。

席も決まった所でHRが続けられるのであった。

### 第三話（前書き）

お気に入りの登録人数が一人増えました。

嬉しい限りです。

### 第三話

side辰哉

「それではHRを続けるぞ。諸君らにはISの基礎知識を半年で覚えてもらう

その後実習だが、基本動作は半月で染み込ませろ、良いか、良いなら返事をしろ

良くなくても返事をしろ」

なんとという鬼教官ぶりだろうか、

流石に付いてこれない人もいると思「ハイ!!」

皆納得するのか、憧れの存在補正でも掛ってるのかな？

side一夏

一夏はこの理不尽な言葉にも素直な返事をする周りの女子達に

茫然として、姉の事を思い出していた。

俺の姉、織斑千冬は第一世代IS操縦者の元日本代表だ。

ある日突然引退し姿を消してしまっただが、っていうか教師してたのかよ。

心配した俺がバカだった。

side三人称

「皆さんも知っている通りISの正式名称はインフィニット・ストラトス」

日本で開発されたマルチフォームスーツです。十年前に開発された当初は宇宙空間

での活動が想定されていたのですが現在は停滞中です。アラスカ条約によって軍事利用

の禁止されているので今はもっぱら競技種目スポーツとして活用されていますね。

そしてこのIS学園は世界で唯一のIS操縦者の育成を目的とした教育機関です。

世界中から大勢の生徒が集まって操縦者になるため勉強しています。様々な国の

若者達が自分たちの技能を向上させようと日々努力してるんです。では、今日から三年間しっかり勉強しましょうね。」

さきほど一夏に自己紹介してもらおうとした時とは違って、教師らしい事をいっている。

「はい」

それに返事をする生徒たちも元気が良い、この三年間に様々な希望を夢見ているのだろう。

side辰哉

ホームルームが終了し、今は休み時間HR中の視線から解放されると思っただが、

様々なクラスから女子が来ており、むしろHRの時よりひどくなっている。

「なあ、辰哉あこの状況どうにかならないのか？」

一夏が俺の席まで来て助けを求めている。

「俺は問題ないぞ、少し上の方に視線を向ければ女子の目線なんて見えないし感じない

からな。自分の身長を生かした素晴らしい回避方法だな。」

「俺にも出来る対処法はないのかよお」

助けてくれえ、等と言って俺にもたれ掛かってくる。

一夏には悪いが俺はこれ以外にこの状況を打破する方法を知らない

そんな風に一夏とじゃれてると筈がやってきた。

「おい一夏、筈がきたぞ。」

筈に気付いてない様なので教える。

「おお、筈どうした」

「少しいいか？」

一夏と筈の会話を見ていると筈が此方に目線で何かを訴えている。

如何して欲しいのか分からないが一夏と二人で話したいのだろう。

「箒、一夏に用事があるんじゃないのか？」

一応、一夏と二人きりになるフォローを試してみる。

「そ、そうだ。悪いが辰哉、一夏を借りるぞ。」

どうやら二人きりになる前から緊張している様だ。

「そうか、じゃあ俺は箒と話してくるよ、箒、屋上で良いか？じゃあ辰哉、また後でな。」

やれやれ、唐変木な一夏に箒の恋は何時になったら届くのやら？

その後少し上に視線をずらしながらゆっくりと休み時間を過ごすのであった。

一時間目が始まった。

この時間はISの基礎について学ぶ時間らしい。

だが、しかしこれは難しいアニメで得た知識なら多少分かるが、そんなのごく一部だ。

「では、此処までで質問のある人、」

山田先生が授業をしているが全く頭に入っていない。

（このアクティブ何ちゃらとか広域うんたらとかどうゆう意味なんだ？）

まさか全部覚えなれないのか？）

奇跡とも言えるだろうか？

この時に二人は全く同じ事を考えていた。

「織斑君何か有りますか？」

山田先生が教師らしく聞いてくる。どうやら後ろの席にいる俺よりも

一番前にいる一夏の方が話しやすいみたいだ。

「え、えっと」

一夏が言いにくそうに声を上げる。

「質問が有ったら聞いてくださいね。何せ私は先生ですから。」

山田先生は優しく問いかける、すると一夏も覚悟を決めたのか手を挙げる。

「先生」

「はい、織斑君」

山田先生は教師として頼られるのが嬉しいのか、笑顔で答えてくる。しかし、次の一言で先生はひどく困る事になる。

「ほとんど全部分かりません。」

「え、全部ですか、今の段階で分からないって人はどの位いますか？」

先生も自分の教え方に問題が有るのかと思いはかの女子にも分からない所がないか

聞いている。

だが残念、俺も分からない。なぜなら入学前の参考書を読んでないからだ。

此処で見栄を張って手を挙げないとあとで困るので手を挙げておく。

「はい、俺も分かりません。」

「え、四倉君もですか、どうしよう」

山田先生も困っている

「織斑、四倉、入学前の参考書は読んだか？」

俺は読んでないが一夏は……………間違っつて捨てたんだっけか

「あの分厚い奴ですか」

一夏が確認している。

「そつだ。必読と書いてあっただろう。」

と千冬さんが返答する。

「いやあ、間違えて捨てました」

言った瞬間に一夏が物凄い音と共に出席簿で殴られる。

「四倉、お前はどつした。」

俺の席まで歩きながら一夏にした質問と同じ内容の質問を一夏にしてくる。

「俺は、読む気になれなくて読んでません。」

一夏と同じ様に俺の事を殴るが、

俺の身長が高すぎるため振り下ろした出席簿のスピードがでず。

威力は強めのげんこつ位だった。

「チツ、まあ良い。二人とも後で再発行してやるから一週間で覚える、良いな。」

ダメージを与えられなかった事に対して舌打ちしながら言った。

「いや、一週間であの厚さはちょっと。」

一夏が最もな意見を言う

「俺も気分が乗らないなあ。」

俺も少し厳しいと、遠まわしに言ってみるが。

「やれとっている。」

この眼力には逆らえず、

「はい、やります。」

二人揃って言うのであった。

「では、続けます、テキストの十二ページを開いて下さい。」

山田先生の声で授業が再開された。

## 第四話（前書き）

見ている人がいるとそれが少数人数でも気合が入ります。

## 第四話

side辰哉

先程の授業が終わり今は休み時間、相変わらずの珍獣扱いに俺と一夏は

この状況に一緒に耐おり、一夏は机に突っ伏してした

「ちよつとよろしくて」

このゆかなボイスはセシリアか、読者の人は忘れてると思うけど

ISに触れば俺はそのISを創造できるから是非とも彼女の専用機である

ブルー・ティアーズは一度触れて手に入れておきたい。

となれば、さつそく手に入れる為に頑張るか。

「はい、何でしょうセシリア・オルコットさん」

一夏が返答する前に答える

セシリアの機嫌を取るにはこんな感じで良いはずだ。

「おや、私の事を知っている様ですね。」

「当たり前です。入試主席のエリートなんですから。」

セシリアはエリートという言葉に弱いはずこのまま調子に乗せておけばよい。

「ええ、よくわかってるじゃないですの。良いですわ、何か困った事が有ったら

言いなさいな。泣いて頼めば力を貸して差し上げますわ。」

よし掛かった此処から一気に行くぞ。

「有難うございます。あのくもしかして…その綺麗なイヤークフスは専用機の

ブルー・ティアーズの待機状態ですか？良ければ少し見せて頂いてもよろしいでしょうか？」

ちよろい事で有名なセシリアだこれでOKなはず。

「このブルー・ティアーズの美しさが分かるとは、仕方ありませんわね。

特別に少し位なら見ても構いませんわよ。でもあまりベタベタ触らないで

下さいね。」

キター、ブルー・ティアーズGETだぜ。

「有難うございます。では少し失礼して。」

国家機密の専用機を待機状態とはいえ他国の人間に触らせるとは、ちよろいな。

「こちら辺で一夏にパスするか。」

「そいえば、オルコットさんは入試で唯一教官を倒したそうですね。」

「ええ、そうですね。何せ私はエリート中のエリートですから。」

「あれ、俺も倒したぞ教官」

「一夏が復活して、話に入ってきた。」

「はあ？」

セシリアが反応している。

「倒したってゆうか、いきなり突っ込んできたのをかわしたら壁に打つかって動かなくなったんだけど。」

「私だけと聞きましたが」

自分だけ教官を倒した事を誇ってたのだろう。セシリアがショックを受けている。

「女子ではってオチではないのか？」

「あなた、あなたも教官を倒したってゆうの!？」

大声で一夏に質問している。

「えっと、お、落ちつけよ。なあ」

「これが落ち着いていられ」

セシリアが此処まで言いかけた時に

キーンコーンカーンコーン、とチャイムがなった。

「話しの続きはまた改めて、よろしいですわね。」

そう言ってセシリアは自分の席に戻って行った。

こうして休み時間は終わり、俺はセシリアのブルー・ティアーズ

獲得し、次の授業が始まるのであった。

#### 第四話（後書き）

辰哉はブルーティーズに触るために下手にでています。

## 第五話

（side 辰哉）

一日の授業が終わり放課後になったので、俺と一夏は教室でゆっくりしていた。

「今日はうるさい女に絡まれたりして災難だったなあ。一夏」

まあ、ブルー・ティアーズを手に入れてもう話す必要もないから

一夏に会話をパスしたなんて言ったら怒られそうだな。

此処は同情の振りでもしとくか。

「本当だよ。それに加えて参考書まで一週間で覚えるなんて言われるし。」

それは俺もだよ、活字ってのは中々読む気になれないんだよね。

こんな感じで放課後を過ごしていると山田先生がやってきた。

「二人ともまだ教室に居たんですね、良かったあ。」

二人が寮で過ごす部屋の力ギを持ってきました。」

「えっ、一週間は自宅から登校って聞いたんですけど、」

一夏が聞いていた内容と違つと山田先生に質問している。

「お前らは世界唯一のIS操縦者だぞ、よく考える馬鹿者。」

いつの間にかいた織斑先生が質問し答えている。

「なるほど、わかりました。では部屋のカギを頂けますか？」

俺は既にISの創造は出来るが、一夏は一人で外に出すと拉致とかされそうで危険だし

千冬さんは創造の事を知らないからな、配慮したんだろう。

「え、俺荷物ないんだけど、」

一夏がそんな事を言っている。俺の場合は荷物が無いなんてありえない。

一度触れば創造出来て操れる。この力を使えば何時も使っているパソコンや日用品など

すべて創造可能だからね。

「私が手配してやった。携帯の充電器と洋服だけで充分だろ。あとは暇なときにも取りに行け。」

この言葉を聞いて一夏はうなだれている。

一夏、これはご愁傷様だな。

「四倉、お前の分も一夏と同じ物だけ持ってきたが問題ないな。」

千冬さんが俺に聞いてくるが能力があるので問題ない。

「ええ、俺はそれで大丈夫です。」

「よし、では鍵を渡すが、山田君」

「はい、織斑君が1025室。四倉君がお隣の1026室です。」

そう言いながら山田先生は俺たちに部屋のカギを渡してくる。

「じゃあ辰哉さっそく部屋に行ってみようぜ」

さっきまで自分の荷物の少なさに沈んでいた一夏だが、自分の部屋が気になるのか

復活して子供の様にはしゃいでいる。とか言いつつも俺も結構楽しみなで。

「わかった。行くうぜ。」

と同意する。

「それじゃ、俺と一夏はもう行きますんで、」

山田先生と千冬さんに挨拶しつつ部屋に行く俺達であった。

## 第六話

（side一夏）

「ここか。」

1025室の前に付き入ろうとしている。

辰哉は部屋まで来たら先に入って行ってしまった。

俺も部屋にはいるか。

「お、おお、おおお」

部屋の中はまるで高級ホテルのような豪華な部屋になっていた。

思わず、歓声をあげてしまう。

部屋に感動していたらシャワー室から声が聞こえた。

「誰かいるのか？」

一人部屋じゃないのかよ

マズイ、相手は同室の相手が男だって事を知らないぞ、このまま出てこられたら

騒がれてしまう。どうしよう、どうしよう

「ああ、同室になった者か。これから一年よろしく頼むぞ」

何も良いアイデアが思い浮かばず、オロオロしている間に同室の相手が出てきてしまった。

「こんな格好ですまないな。シャワーを使っていた。」

ここで一夏

が振り替える

「私の名前は篠ノ之 箒」

頭にかぶっていたタオルを外しやっとな手が誰だか分かったのか

「~~~~~」

箒は赤面せていた。

「.....」

両者の間に沈黙が生まれる。先に沈黙を破ったのは箒だった。

「い、一夏」

「お、おっ」

一夏はぎこちなく返事をする。

「み、見るなあ」

箒が声を上げる

「わ、悪い」

そう言いながら後ろを向く、

「何故お前が此処にいる？」

箒が最もな疑問を口に出す。

「俺もこの部屋なんだけど、何お前、俺と部屋なのか？」

「ッ」

箒は一夏にタオル姿を見られたのと一夏と同室である事の恥ずかしさのあまり

暴走し木刀で一夏に突撃する。

もちろん一夏もそれを攻撃を受けまいと部屋の外に出て扉を閉める。

しかし部屋から出るとそこには無防備な服装の女子達が数名いた。

「なになに」「あ、織斑君だ。」「へえ、あそこって織斑君の部屋なんだ。いい情報ゲット」

どうする、戻れば箒に殺されるし周りの女子は刺激の強い格好をしている。

……………そうだ、辰哉だ。辰哉の所に行こう。

side辰哉

俺は一人部屋か、誰かと同室じゃなくてよかったあ。

一人で安堵していると廊下から声が聞こえてきた。

なんだか廊下が騒がしいな、一夏が何か問題を起こしたのか？

「おい、辰哉、俺が一夏だ開けてくれ。」

ドンドンと扉を叩きながら開けてほしいと言っている。

仕方ない、開けてやるか。

扉を開けて一夏を迎え入れる。

「まあ、座れ。どうしたんだそんなに慌てて？」

「ああ、実はこんな事が有って……

それで俺が部屋に戻る様に協力してくれないか？」

一夏の説明が終わり部屋に戻る様に協力してほしい。と

言ってきた。

「謝って入れてもらえば良いじゃないか。」

無難な意見を提案する。

「謝るのを手伝って欲しいんだよ。」

なるほど、めんどくさいが仕方ない、主人公の頼みだ聞いてやろう。

「貸し一っな。」

「そうか、助かる。ありがとう辰哉」

「夏がお礼を言ってくる。」

「よしじゃあまずは一夏の部屋に行くぞ。」

「おう」

1026室から出るとそこにはと一夏から聞いた通り無防備な女子達がいいた。

「あれ、四倉君の部屋は此処なんだあ」

「織斑君とはお隣さんなんだね。」

「良い情報ゲット!!」

少し目線を上に向ければ女子が視界に入らないので、

そのままスルーしながら1025室の前までいく。

「篝、少し良いか？」

扉をノックしながら聞いてみる。

「四倉か、構わん入れ。」

入室の許可が出たので一夏と一緒に入る、

「……………」

箒は不機嫌そうに沈黙している。

「ほら、一夏、」

「お、おう…えーと箒さつきは悪かった。許してくれ。」

一夏が真剣に謝っている。

「ふん、まあ良いそんな事より。どうゆうつもりだ。」

「えっ?」

一夏は質問の意味が分からないのか聞き返している。

「どうゆうつもりだと聞いている。男女七歳にして席を同じゅうせず。常識だ。」

「何時の時代の常識だよそれは、いやしかし十五の男女が同棲、同居するのは

確かに俺も問題があるとは思って…辰哉、お前はどつなんだ?」

一夏が俺に話しを振ってくる。

「俺は一人部屋だから関係ないな。でも同居人が幼馴染で良かったじゃあないか

他の女子だったら大変だぞ。」

「そうだな、そう考えると同居人が箒で良かったよ。」

この一言で箒の機嫌が直らないものか。

「私で良かった……一夏が、私で……えへへ」

ohh 箒が破顔しているが機嫌が直ったとゆう事だろう。

「一夏、俺はもうそろそろ帰るぞ。じゃあな。」

「おう、ありがとな辰哉、たすかたぜ。」

とりあえず一夏の目的である部屋に戻る事は成功したので部屋に戻る事にした。

「疲れたな。」

初日から一夏が事件を起こし疲れていた俺はやらなければいけない事を思い出した。

「荷物、創らないと。」

それから夜遅くまでパソコンやDVDを創り出す作業をする四倉であった。

## 第七話

side辰哉

次の日の朝、学校へ行く為の準備をしていると一夏が朝食に誘ってきた。

「辰哉、起きてるか、飯食いに行こうぜ」

一夏が扉越しに言っている。

「ああ、今行くから待ってる。」

そう言うてから身支度を終わらせ部屋から出ると一夏だけではなく  
篤也

一緒にいた。

「おお、二人ともおはよう。」

二人に挨拶をすると、

「ああ、おはよう。」

と一夏が元気に返し、

「ああ」

と篤が少し不機嫌そうに返してきた。おそらく一夏と二人で食事が

したかったのだろう。

「悪いな箒」

箒に謝罪を入れると

「まあ良い、チャンスは明日もある。」

と許してくれた。

「ん？何の話をしてるんだ二人とも？」

と相変わらずな唐変木王一夏。そんな会話をしている内に食堂に着いた。

「箒はどうする？」

一夏が箒に朝食をどれにするか尋ねている。

「私は和食定食だ。」

「じゃあ俺もそれで良いかな。」

どうやら一夏はどれを頼むか迷っていた様だ。

「よかったな箒、一夏と同じで」

と、一夏が少しでも箒の気持ちに気付く様にフォローを飛ばすが、

「何が良いんだ？」

「夏はこのままだ」

「所で辰哉、お前は何食べるんだ？」

「俺か、俺はざるそば（大）だけど、」

そばは最高だ。食欲のない朝でも楽にたくさん食べられる

「ざるそばかあ、それも良いな、お！この席が開いてるぜ」

「夏はそう言って席を確保している。そこに座り朝食を摂っていると三人組が」

話しかけてきた。

「四倉君、となり良いかな」

と聞いてくる。なぜ一夏ではなく俺に聞くかは単純に席順が俺・一夏・篝の順だからである。

「ああ、問題ない。」

これといって問題ないので許可する。

「織斑君と四倉君って朝漣い食べるんだあ」

「男の子だね」

どうやらこの三人組、男という珍獣に興味があるらしい。

「俺は図体がでかいからな。これ位食べないと昼まで持たん。」  
と返しておく

「てゆうか女子ってそれだけしか食べないで平気なのか？」

「私たちは…ねえ」

「うん…平気かな。」

「お菓子とか良く食べるし。」

約一名を除いて困るコメントらしい。ダイエットでもしているのだらう。

「私は先に行くぞ」

そう言っただけは立ち上がり食器を返しに行った。

「ああまた後でな」

「織斑君と四倉君と篠ノ之さんって仲が良いの？」

「同じ部屋だっけ聞いたけど」

三人組の一人が聞いてくる。

「まあ幼馴染だし。」

一夏がそう答え

「俺の場合は幼馴染で良く問題を起こす一夏のフォロー役と言った所かな」

俺はこう答える。

「ちょっと待てよ辰哉、その言い方だと俺が何時も問題を起こして  
るみたいじゃないか」

一夏が反論してくるが、

「昨日俺を頼って部屋まで来た事、忘れた訳じゃあ無いだろ？」

俺がそう返すと

「うぐッ」

と苦虫を噛み潰したような顔をした。

「二人とも仲が良いんだねえ」

「何時まで食べている。食事は迅速に効率よく摂れ」

女子達と話していると千冬さんが手を叩きながら速く食べる様に促している。

「私は一年の寮長だ遅刻したらグラウンド十周させるぞ。」

グラウンド十周が嫌なのか周りの女子達は無言になって食事を再開した。

朝食を摂り終え教室に行き、HRを受けてると織斑先生が連絡事項を生徒に伝えている。

「これより、再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決める。クラス代表者とは対抗戦だけでなく生徒会の会議や委員会の出席など

まあクラス長と考えて貰って良い。自薦他薦は問わない誰かいな  
いか？」

クラス代表かあ多分男である一夏と俺が推薦されるんだろうな。

クラス対抗戦は中国の代表候補生の鈴がでるんだよなあ。

鈴の専用機の甲龍も欲しいし此処はクラス代表になっても良いかな。

「織斑君を推薦します。」

「私もそれが良いと思います。」

「私は四倉君を推薦します。」

「私も辰哉君を推薦します。」

女子達が男である俺と一夏を推薦し始めた。

「お、俺？」

一夏は驚いている様だが俺は甲龍を手に入れるチャンスなので顔には出さないが

逆に喜んでいる。

「他には居ないのか？居ないならこの二人から選ぶぞ」

「ちよつと待った。俺はそんなのやらないぞ。」

「落ち着け一夏、織斑先生に反論して勝てる訳ないだろう。諦めろ。」

俺は一夏が織斑先生に殴られる前にストップをかけている。

「納得がいきませんわ。そのような選出は認められません。」

男がクラス代表なんて良い恥さらしですわ。このセシリア・オルコットに

そのような屈辱を一年間味わえとおっしゃるのですか？

大体文化としても後進的な国で暮らさなければいけない事自体、苦痛なのですわ。」

「イギリスだつて対してお国自慢ないだろ。世界一マズイ料理で何年覇者だよ。」

一夏が反論を始めた。

「美味しい料理はたくさんありますわ。あなた、私の祖国を侮辱しますの？」

あなたはどのですの？四倉さん」

前半の部分は強い口調で言い、後半の俺に意見を聞く時は優しく聞いてくる。

どうやらセシリアはこの前の接し方のせいで俺の事を都合のよい男とか女尊男卑

の生み出した弱い男、等下僕のように思っているのだろう。

しかし俺が下手に出て話していたのは、ブルー・ティアーズが欲しいからであって

セシリアの思っている様な理由では無い此処はセシリアの俺に対する認識を改めて貰おう。

「まあ、二人とも落ち着け。俺の考えだとオルコット、日本は後進的ではないと思うぞ。

なぜならISを開発国は日本だ、それに性別で人の善し悪しを決めるのは君だけではないが

悪い癖だ。直した方が良いと思うぞ。」

的確な反論と少し棘のある言い方に意見を言う。

「あなた、この前の態度はどうしたんですの!」

手下だと思っていた人間に裏切られてさらに怒るセシリア

「それは君の専用機に興味があったから下手に出ただけで君の専用機はもう見れた

からね、君自身にそんな態度でいる必要などもう無いのだ。」

ここで自分が下手に出た理由をばらす。

「ツ~~~~!!!!」

セシリアの怒りは臨界点を越えた。

「決闘ですわ!!!!」

セシリアは怒鳴りながらそう言った

「いいぜ、四の五の言うより分かりやすい。」

「えー、やりたくないが仕方ない。」

甲龍を得る事につなげる為に

「わざと負けたら私の小間使い、いえ奴隷にしますわよ。」

と言うセシリアに

「オルコット、現在では奴隷とゆう身分は存在しないぞ。」

「揚げ足を取らないで下さいまし、言葉の綾ですわ。」

冷静に突っ込みを入れるとそれに反応するセシリア、これは面白いな。

「ハンデはどの位つける？」

と一夏

「あら早速お願いかしら？」

拍子抜けしたかの様に言うセシリア

「俺がどの位ハンデを付ければ良いのかなあと」

言った瞬間にクラス中に笑いが起きる。

「織斑君それ本気で言ってるの？」

「男が女より強かったのなんてISが出来る前の話しだよ」

「もし男と女が戦争したら三日持たないって言われてるよ」

「寧ろ私がハンデを付けなくて良いのか迷う位ですわ。」

日本の男子はジョークセンスがあるのねえ」

笑いながら発言する女子達と一緒にセシリアもそう言う。

「話しはまとまった様だな。では勝負は次の月曜、第三アリーナで行う」

三人はそれぞれ準備をしておくように。」

決闘か、どうなることやら。

## 第八話（前書き）

お気に入りの件数が10件を超えてました。

見てくれている皆さん、ありがとうございます。

## 第八話

（side辰哉）

「織斑、お前のISだが準備まで時間が掛かるぞ。」

千冬さんが一夏に専用機の事について話している。

「へ？」

しかし一夏は理解していない様だ。

「予備の機体が無いだから、学園で専用機を用意するそつだ。」

それに構わず説明を続ける千冬さん。

すると専用機が貰える事に驚いている周りがざわざわと騒ぎ始めた。

「専用機？一年のこの時期に？」

「つまりそれって政府からの支援が出るって事？」

「凄いなあ、私も早く専用機欲しいなあ」

「専用機が有るってそんなに凄い事なのか？」

一夏が疑問を口にする。

「それを聞いて安心しましたわ。クラス代表の決定戦、私とあなたでは勝負は見えて

いますけど、流石に私が専用機、あなたが訓練機ではフェアでは

有りませんものね。」

「お前も専用機つてのを持つてるのか？」

「ご存じないの？ よろしいですわ庶民のあなたに教えたさし上げましょう。」

この私、セシリア・オルコットはイギリス代表候補生、つまり現時点で既に

専用機を持っていますの。世界にISはわずか467機、全人類60億人の中で

専用機を持てるのはエリート中のエリートですわ。」

「467機？ たった？」

セシリアが一夏に講義をしているとクラスの女子の一人が補足をはじめた。

「ISの中心に使われているコアって技術は一切開示されてないの。現在世界中に有る

ISは467機その全てのコアは篠ノ之 束博士が作製したもののよ。」

「ISのコアって完全なブラックボックスなんだって。篠ノ之博士以外は誰もコアを作れないんだから。」

「でも博士はコアを一定数以上造るのを拒絶しているの。」

「国家、企業、組織、機関では割り振られたコアを開発、研究訓練を行うしかない状況なんだよ。」

と二三人女子が補足する。

「本来なら、専用機は国家もしくは企業に所属する人間しか与えられない。」

「が、お前の場合は状況が状況なのでデータ収集を目的として専用機が与えられる。」

「理解できたか？」

と千冬さんが専用機が与えられた理由を説明する。

「何となく」

一夏が答える。

「あの、四倉君には専用機ないんですか？」

クラスの誰かが手を挙げて質問をする。

「ああ、四倉の専用機は我々では用意されない。」

俺のISは用意されないのか、まあ想定内だな。

「どっかの天災から連絡が入ってな、四倉には自分で専用機を造らせるから」

「用意しなくても良いと言われたのだ。」

「ええ四倉君IS造れるの!!」「コアはどうやって手に入れたのかなあ」

なるほど、東さんか。確かに俺は自分で創造したISしか動かせないからな。

それにしても、俺はISを創造できるだけあって造り方は分からない何か教えを乞われたらどうするか、

「あの、先生篠ノ之さんってもしかして篠ノ之博士の関係者なんでしょうか？」

誰かが筈の名字に気付いたのか質問を飛ばす。

「そうだ、篠ノ之はあいつの妹だ」

先生が疑問に答える。しかし東さんをあいつ呼ばわりとは千冬さんも凄いな。

まあ普段の千冬さんを知っている人から見たら当然か。

「あの人は関係ない!!」

有名人の妹がいると騒いでいたクラスに筈が一喝した。

「私はあの人じゃない、教えられる事も何もない。」

「……………」

クラス中が沈黙する。

「山田先生、授業を」

千冬さんが低い声で言う

「は、はい。」

この状況では授業もやりにくいだろつに。

「で、では、テキストの……………」

授業がおわり先程の事で一人でいた箒に昼食を一緒に食べようと

一夏と俺の二人で話しかけていた。

「箒、飯食いに行こうぜ。誰か一緒に行かないか？」

一夏が声を掛けると三人が返事をしてきた

「はいはい」「行く行く」「お弁当持ってるけどいきます。」

「やっぱりクラスメイト同士仲良くしたいもんな。な、お前もそう思うだろ。」

一夏がそう誘うが

「わたしはいい」

と跳ね退けられてしまった。

「そうゆうな、ほら立て立て」

一夏が箒の手をつかみ強引に箒を立たせようとする。

「わたしは行かないと、」

「なんだよ歩きたくないのか？ おんぶしてやるつか？」

その言葉が癪に障ったのか一夏に何らかの格闘技をかけて投げようとした。

「うわ」と一夏が技にかかるが、

「大丈夫か一夏」

俺が受け止める。体がバカでかいのだ、これ位は容易い。

「あぶねえ、有難うな辰哉助かつたぜ」

一夏が俺に礼を言う

「問題ない、貸し二つだ。」

と短く返す、俺はこの二人のやり取りを見ていられないので、

「おい箒、すぐに手を出すのは悪い癖だ。そんな事しているとクラスから浮いてしまうし」

一夏にも何時か嫌われてしまっぞ。だから、ここは大人しく皆で飯を食おう、な？」

「わ、わかった。」

箒は何とか納得してくれたようだ。全く手の掛かる幼馴染だ。

俺が一夏を受け止めた事で騒ぎを起こさなかったので

一緒に昼食を食べようと言った三人はまだ居る。

「じゃあ皆で飯に行くか」

三人は「うん」と返事をして一緒についてくる。

食堂でそれぞれ話しながら昼食を摂っていると

「なあ箒、ISの事教えてくれないか？ このままじゃ何もしないでセシリアに  
負けそうだ。」

と、一夏は箒に頼み込む。

「くだらない挑発に乗るからだ。」

箒は冷たく一夏の話しをあしらう。

「そこを何とか、頼む。」

一夏が頼み込んでいる。

ここで俺は小さな声で箒にアドバイスをする。

「なあ箒。」

「なんだ。辰哉」

「此処は一つ、一夏にISの事を教えてやっては如何だ？」

「何故私がそんな事をしなければならない。」

「ここで承諾しとけば、お前と一夏の『二人きりで』ISの訓練ができるぞ。」

「そうか、二人きりか、そうかそうか、分かったそうしよう。」

二人きりなのがそんなに嬉しいのか、ここまで話した所で箒は微笑みながら

「おい、一夏お前にISを教えてやるぞ。」

といった。

「そうか、ありがとう。助かるよ箒！」

こんな調子で機嫌を良くした箒は一緒に連れてきた三人とも仲良く話し

少しはクラスに馴染めたようだ。

昼食が終わって、授業も終わり、一夏はISの事を教えてもらっために剣道場へいった。

俺は誰もいない第三アリーナへ行きブルー・ティアーズのBT兵器を創造、

セシリアとの戦いに備えてBT兵器の動きを確認した。その結果分かった事は

- ・ BT兵器はいくらでも出せる事
- ・ BT兵器と併用して主力武器も使えて動ける事。
- ・ ビットのレーザーを曲げる事が可能な事。

これは自在に操る能力の延長で任意で最大稼働状態に出来るのだから。

合成もしてみたいが入試会場で動かしたISは合成したら出力が下がりがりそうだし、

クラス代表決定戦の当日に一夏のISを創って合成するか。

このままクラス代表決定戦までBT兵器に慣れる日々を送るのであった。

## 第九話

（side辰哉）

あれから一週間が経過し、遂にセシリアと対戦する日になった。

筈と一夏は…おそらくずっと剣道をしていたのだろう。

さつきから口喧嘩をしている。

「織斑君、織斑君、織斑君、届きました織斑君専用のIS」

そうこうしている内に一夏のISが届いたみたいだ。

「織斑、すぐに準備をしろ。アリーナを使用できる時間は限られているからな。」

ぶつつけ本番で者にしろ。」

千冬さんが一夏をせかす。

「これが、織斑君専用IS白式です。」

その言葉と共にガレージが開き白式が出てくる。

そのまま原作と同じ様に一夏は出撃していった。

結果から言うと一夏は原作と全く同じように負けた。

ただ、見ている分には凄くカッコよかった。

ISの戦闘は思った以上に興奮するなあ。

戦闘終了後一夏が戻ってきた。

今は織斑先生に今回の戦闘での反省点を聞いている。

「俺、なんで負けちゃたんだ？」

「バリア無効化攻撃を使ったからだ。武器の特性を考えずに使うからあなる。」

「バリア無効化？」

「相手のバリアを切り裂いて本体に直接ダメージを与える。」

「

一夏の反省会が終わり次は俺の番になった。

「一夏、待機状態で良いから少し白式を見せてくれないか？」

俺は少しでもISを強くしたいしこのままでは近接用の装備がないので

一夏のISが欲しかった。

「別に構わないが、なんでだ？」

最もな疑問を言ってくる一夏

「近接用の武器が完成してなくてね、ちょっと見せて欲しいんだ。」

「そっか、辰哉って自分でIS用意してるんだもんな。いいぜそれ位。」

そう言っつて白式を見せてくるいちか

「じゃあちよつと失礼するぞ。」

かるく白式に触れる、良しこれで創れるな。

「四倉、次はお前だ、早く準備をしろ。」

織斑先生がISを装着しろと言っってくる。

「少し待って下さいね。今IS完成させますから。」

俺はブルー・ティアーズと白式を創造する。

そして、二つのISを合成すると……………

そこには二つのISを足したような水色をしていた。

「な、なんだこれは、」

千冬さんが驚いて此方に聞いてくる。

「俺が用意したISですよ。まだ未完成ですが。」

俺が千冬さんに説明する。そうこのISは未完成なのだ。

この先様々なISと合成して強化して行って最強のISを造るのだ

「そうでは無いどうやって作ったか聞いている。」

「簡単ですよ。少し特殊な方法を使ったのです。俺にはちょっと不思議な力

が有りまして……………。まあ続きは帰ってきてから話します。」

とりあえず信じて貰えそうにないが話してみる。

この能力を見せたのは一夏がISを見せてくれたお礼だ。

俺は、そのままISを装着し俺はアリーナへ飛び出すと……

「ようこそ、いらっしやいましたわ」

ライフルを構えたセシリアがいた。

## 第十話

side辰哉

セシリアは今キリつとした表情でこちらをみている。

一夏にフラグを建てられた筈なのに………流石は代表候補生と言った所か……

「あら、四倉さん。逃げずにきたのですね。そんなあなたに最後のチャンスを

あげますわ。」

チャンスか、内容は予想出来るが聞いておこう。

「チャンスね、どんなチャンスだ？」

「わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理、ですから、今こゝで謝るなら

許してあげない事もなくってよ。」

「ふざけた事を抜かすな、さっさとやろうぜ。」

「これだから血気の盛んな輩は嫌ですわ。みじめな姿を晒さない用に精々頑張りなさいな。」

試合開始のブザーがなった。

先手はセシリアだった。彼女の主力兵器のスターライトmk?で此方を狙撃してくる。

しかし、そう簡単には当たらない。なぜならこのISは自分が創造した物で自在に操る事が可能なので

常に最大稼働率を維持できる。だから、一夏のように反応に追いつけず被弾するなんて事はない。

スターライトmk?の狙撃を回避しながら此方もセシリアと同じスターライトmk?を呼び出し

セシリアの射撃を避けがらこちらも射撃をするが全く当たらない。

おそらく創造した物は自在に操れても技術が無いと出来ないものは出来ないのだろう。

「な、何であなたもスターライトmk?を持っているのですか!?  
これは私の専用機の武装

では、」

セシリアが大声で質問してくる。オープンチャンネル 開放回線で話しているから大声で有る

必要は無いのだが、祖国だけの武器だと思っていたら他人が全く同じものを持っていたのだ。

混乱してそこまで考えが及ばないのだろう。

「オルコットさん………俺と君が初めて話した時に君が待機状態のブルー・ティアーズ  
を見せてくれたじゃあないか。」

セシリアの質問に素直に答える。

「見せたも何も素手で触っただけですよ、機械を使わずに武装の設計図を盗み出すなんて

出来る訳ないですわ!!」

「確かに普通はこんな事できない。しかし……何人もの科学者が莫大な時間を掛けても

開発出来ないような代物であるISを一人で造る篠ノ之 束の様な存在がいるのだ。  
触っただけでその物を創り出せる人間がいても不思議じゃない。」

「それでもISに関してあなたは素人のはずです。武装を真似ただけじゃ勝つ事は

出来なくてよ。」

そう言いながらセシリアはB T兵器と展開する。

確かにただ武装を真似ただけじゃあ俺はセシリアに負けるだろう、

しかし此方は無限の数だけ、しかも動きながらB T兵器を使用でき、

その上、フレキシブル偏向射撃まで出来る、経験ではこっちが負けてるからな、

今自分しか出来ない偏向射撃と無限のB T兵器で勝負だ。

「B T兵器を使うか……なら此方も使わせてもらおう。」

セシリアがB T兵器を使うので此方もB T兵器で対応する。

創造する数は……とにかく大量だ。数える事を辞めたくなるほど大量に創造する。

「ライフルだけではなくB T兵器まで持っていたとは！ しかもなんですのその数は……！」

俺の能力では自在に操る事は出来ても、精密射撃などの技術が必要な事は出来ない。

だから避ける事の出来る『点』では無く、大量のB T兵器を使った『面』での攻撃

それに加え、偏向射撃を使いレーザーの当たる『面』の面積を広げ打ちまくる。

B T兵器を使用したままでは動けないセシリアは避けるためにB T

兵器を戻し、

避けようとするがもう遅かった。

セシリアがその試合で最後に見た光景はまるでオーロラの真下に居る様な

一面のレーザーだったと言う。

## 第十話（後書き）

戦闘が短すぎるし描写も下手ですね。もっとうまく書けるように頑張ります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2314ba/>

---

～ I S ～ 創造録

2012年1月14日13時52分発行